



前進座公演

山本周五郎 原作

田島栄 脚色

十島英明 演出

柳橋物語

「待っているわ」そのひと言が
おせんの一生涯をきめた

生きることのきびしさと

愛することのかなしさと――

江戸・下町を舞台に

ひたむきに生きる若者たちを

情緒ゆたかに謳いあげる

山本周五郎の

珠玉の作品

待望の再演!!

演出	効果	音楽	照明	装置
手	小野	田村	越田	寺田
隆	文	文	知	義
	隆	文	子	雄
				人

演劇鑑賞会☆松江市民劇場

3月22日(水) 18:30 開演

島根県民会館 大ホール

松江市民教育委員会後援

●入会と観劇のお問合せは…松江市民劇場事務局 / 電話(0852) 26-3094



庄吉
中嶋宏太郎



幸太
嵐芳三郎



おもん
浜名実貴



おせん
今村文美



渡会元之



早瀬栄之丞



黒河内雅子



北澤知奈美



横澤寛美



西川かずこ



藤川矢之輔



田中世津子



津田恵一



和田優樹



嵐市太郎



玉浦有之祐



忠村臣弥



上滝啓太郎

前進座 山本周五郎上演記録

(初演年)

1962年	こんち午の日
1964年	季節のない街
1968年	ながい坂
1970年	雨あがる
1975年	さぶ
1977年	扇野
1977年	柳橋物語
1978年	あすなろう
1980年	梅咲きぬ
1981年	夜の辛夷
1985年	つゆのひぬま
1987年	赤ひげ
1989年	わたくしです物語
1990年	青べか物語
1992年	深川安楽亭
1996年	かあちゃん
1997年	地蔵〜イカサマ地蔵騒動譚
2012年	おたふく物語

〈あらすじ〉
江戸茅町にある杉田屋の職人・幸太と庄吉は、どちらも腕も良
く人柄もいい。研ぎ職人の源六の孫娘・おせんは、どちらにも近
しさと親しさをもっていた。
だが、杉田屋の跡取りは幸太に決まり、失意の庄吉は上方へ修
行に旅立つ。別れ際、「一人前になって帰るまで待っていてくれ」
と、おせんに言い、「待っているわ。庄さん」と、答えたそのひ
と言が、おせんのそれからの一生をきめてしまった。
その後、杉田屋からおせんを幸太の嫁にほしと言ってきたが、
祖父の源六は断ってしまう。貧乏人の意地からであった。
間もなく源六が卒中で倒れ、江戸は大火事に見舞われる。この
時、かけた幸太は源六とおせんを助けようと力の限りたか
いながら死んでしまった。「おせんちゃん、生きるんだぜ、諦め
ちゃあいけない」と叫んで――。
ひとり残され、一切の記憶を失ったおせんは、飢えながら迷
い歩く――。火事のなかで拾った赤ん坊をしっかりと抱いて――。

柳橋物語

題字 朱海慶

庶民の生きるための苦しみも悲しみも、
喜びも楽しさも、すべてがここにある。
苛酷な運命と愛の悲劇に耐えて、人間の真実を貫き、愛をまっとう
した江戸庶民の恋と人情を描いた山本周五郎の名作が今、よみがえり
ます。

感想文(前回の公演より)

◇感動しました。
愛をつらぬくむつかしき、け
なげなさに胸をうたれました。
人のうわさが与える影響の大き
さを改めて認識し、自分も知ら
ず知らずに人を傷つけていない
か、気をつけなくてはと思わさ
れました。

◇真実の愛とは何か。また、そ
れを見極める事の難しさを考え
させられた。

江戸の大火の時、武家屋敷の
門が閉ざされ逃げ場を失った庶
民が次々と焼死していく。いつ
の世も、庶民は権力者の犠牲に
なっていると思うと腹がたつた。
しかしながら、焼け跡の中か
らたくましく立ち上り、生活を
していく民衆や、時には陽気に
時にはいじわるしながら、しか
し団結していく長屋の人々に、
底力や明るさを感じられた。

◇本で読んだ柳橋物語は、お芝
居としてどのように表現される
のか、初めはその程度の見方し
か出来なかった。しかし、ただ
良かった、涙が出ただけでは済
まされない何かが残った。
一番分かって欲しい人、心を
知って欲しい人に聞いてもらえ
ない苛立たしき、悔しさがどん
なに残念で辛かったらうと思
う時、おせんが哀れでならなかつた。
感情的になつている時にこそ
感情のままに言葉を出してはい
けない、心を鎮め話を聞く態度
が必要ではないか、傷ついたお
せんが他人の目より自分自身を
信じた時、強くなれたと思った。